

道後温泉源泉の秘密を知る

～歴史編～

江戸時代に作られた郷土地誌「予陽郡郷俚諺集（よようぐんごうりげんしゅう）」によれば、脛を痛めた白鷺が温泉に傷を浸けて癒したのを人が見つけ、入浴し始めたと伝わります。

道後温泉は古代より続く「日本三古湯」の一つ。
分湯場ができるまでの源泉の歴史を順にたどってみましょう。



聖徳太子は平等無差別に恩沢を施し、椿が生い茂る道後温泉の様子を理想の国のようだと言ったと伝わります。

湯桁は「湯槽にいくつもの個人別入浴用枠組をしたもの」とされ、源氏物語では「伊予の湯桁」を数が多いものの例えとして使われています。

入浴客の増加に伴い、源泉開発を進めてきましたが、外湯への配湯で精一杯でした。

「椿の湯」を新設し、国体選手を迎えました。一方で旅館・ホテルの内湯の必要性も改めて感じるようになりました。

源泉掘削に慎重な意見が多い中、利根ボーリングの塩田岩治社長は「掘れば必ず出る」と言い、実際に源泉を掘り当て、内湯の実現に貢献されました。

古代 白鷺伝説

飛鳥

596年 聖徳太子来浴
661年 齊明天皇来浴

平安

源氏物語と伊予の湯桁

江戸

松平定行による温泉施設の充実

明治

明治27年（1894）道後温泉本館 改築

昭和

昭和15年（1940）第2号源泉竣工
昭和17年（1942）第3号源泉竣工
昭和19年（1944）第4号源泉竣工
昭和26年（1951）第5号源泉竣工
昭和28年（1953）第8回国体四国開催・「椿の湯」新設

昭和30年（1955）第6号～第10号源泉竣工
昭和31年（1956）源泉を集め、各施設・旅館などへ湯を送る
“分湯場”が完成・各旅館内湯実現

平成

平成29年（2017）道後温泉別館 飛鳥乃湯泉新設

道後温泉の発展とともに平成25年までに第29号源泉まで開発。
現在は29本のうち、利用可能な18本から源泉を汲み上げ、
本館・椿の湯・飛鳥乃湯泉、そして旅館・ホテルへ配湯しています。



道後温泉別館 飛鳥乃湯泉

道後温泉本館より徒歩10分

営業時間：7:00～23:00（札止22:30）

※コースにより異なる

入浴料：600円～ ※コースにより異なる

休館日：無休（年に1日臨時休館あり）



道後温泉本館

営業時間：6:00～23:00（札止22:30）

※コースにより異なる

入浴料：410円～ ※コースにより異なる

休館日：無休（12月に1日臨時休館あり）